

四旬節第一主日

(2013年2月17日、紫、一級)

四旬節(tempus quadragesimale)は、灰の水曜日の朝課から、復活徹夜祭のミサの前までの時期を指します。この時期には、

- a) 本来の意味での四旬節(tempus quadragesimae)、つまり灰の水曜日の朝課から、御受難の第一主日前日の土曜の9時課までと、
- b) 御受難節(tempus Passiónis)、つまり御受難の第一主日の第一晩課から、復活徹夜祭のミサの前までの時期が含まれます。

四旬節第一主日の今日の典礼は、この四旬節が40日間を通して、御復活の最終的な勝利に至るための闘いであることを思い起こさせます。この闘いには、悪しき天使である悪魔という敵もいれば、善き天使である守護の天使という味方もいます。今日の御福音では、私たちの主が、悪魔の頭(かしら)サタンと闘うため40日間、荒野の中を引き回された箇所が朗読されます。また、そのとき主にお仕えするため天使たちがやって来たことも朗読されます。

本日の主日の御ミサの固有唱は、典礼の中でも独特の性格を備えています。それは全ての固有唱が詩編90という同じ詩編を元に行っているという点です。この詩編は、私たちの闘いにおいて主が私たちにお与えくださる保護と、私たちが忠実であればこの保護によって得られる勝利の確信を歌っています。主が私たちを助けるために送ってくださる守護の天使のことがこの詩編の中にはっきりと歌われていて、そのことは入祭唱に見ることができます。

入祭唱 : *Invocabit me*

入祭唱はこの詩編の最後の節を下敷きにしていて、主に信頼をおく人々に勝利と永遠の命を約束するため、神ご自身が語られます。入祭唱において神が語られるのは随分、稀なことです。このようなことは年間を通じて2, 3度しか起きないことです。

Invocabit me, et ego exaudiam eum : eripiam eum, et glorificabo eum : longitudine dierum adimplébo eum.

彼が私に乞い願うなら、私はその願いを聞き入れる。私は彼を救い出し、栄誉を与え、末永き日々で満たそう。

ここでは、それぞれの動詞の後に来る"eum"（彼を）という単語が強調されていることに気づきますが、これこそ主が私たちの一人一人に向けてくださる気遣いを表しています。神の御言葉に相応しく、この入祭唱の旋律はとてもきっぱりとしていて、静謐な安心感に満ちています。この後には当然ながら詩編 90 の最初の節が続きますが、その節はこの後すぐに詠唱でも用いられているものです。

Qui hábitat in adjutório Altíssimi, in protectióne Dei caeli commorábitur.

いと高きお方の助けにより頼む者は、天の神の保護のもとにとどまるだろう。

昇階唱 : *Ángelis*

本日の昇階唱の歌詞は、今日のミサの他の全ての固有唱と同じく、詩編 90 を元にしてあります。そして、ここではっきりと守護の天使について記述した節が出てきます。

Ángelis suis mandávit de te, ut custódiant te in ómnibus viis tuis. In mánibus portábunt te, ne unquam offéndas ad lápidem pedem tuum.

神はみ使いたちに命じ、あなたの進むすべての道であなたを守らせる。あなたの足が石につまずかないように、彼らは手であなたを支える。

勿論、この歌詞を霊的な意味で理解する必要があります。私たちの足がつまずくかもしれない石とは、誘惑のことであり、私たちの進む道に敵である悪魔が仕掛ける罠のことです。守護の天使の役割は主として霊的なもので、私たちの四旬節の闘いにおいても、その助けを当てにすることができます。この昇階唱の旋律は典型的なものです。典型的とは、ただ単に他の箇所においても見出される様々な定式的表現法が組み合わさっているというだけでなく、グレゴリオ聖歌の他のいくつかの昇階唱と隅から隅まで同じだということです。この旋律

は、とりわけ一音一音が死者のためのミサのレクイエムの昇階唱と同じです。この旋律の母音唱法（ヴォカリーズ）がどれほど柔軟に、異なる歌詞やさまざまな感情の表現に馴染むかに気づかされます。ここで表現されている感情は、善き天使の保護のもとで感じる、静かな安心感です。

詠唱：*Qui habitat*

七旬節と同様に、四旬節の間は昇階唱の後に詠唱が続きます。今週の主日の詠唱は、例を見ないほどの長さという特徴を備えています。この詠唱では詩編90の大部分、つまり全16節のうちの13節が取り上げられます。それは、悪しき霊とその誘惑に対する私たちの闘いにおいて、主が私たちに与えてくださる保護についての考察です。この詩編は本日のミサのすべての固有唱の元となっているものですが、同時にまた日曜日の終課の詩編のひとつとしても知られています。というのも、就眠前に主の保護と守護の天使の助けを仰ぐのはまことに適切なことだからです。

冒頭の節は対話形式で、主に信頼を於く人々に主が授けられる保護を歌っています。それに続く節は、この後の奉献唱と拝領唱で繰り返される美しいイメージを伴って、この神の保護を表現しています。やがて、さらに後の節では、はっきりと名指しで腹黒い悪魔の攻撃とその陰険な術策が語られますが、神に信頼をおく人はこうした悪魔の仕業を逃れ、そうでない人はその手中にはまっています。それから昇階唱で聞いた守護の天使についての節に至り、やがて最後の節では入祭唱で見たとおり、神に祈り求める人々に勝利を約束するため神ご自身が語られるのです。

ここにじかに訳してみましよう。

いと高きお方の助けのもとに暮らす者は、天の神の保護の元にとどまる。

彼は主に言う、「あなたは私の護り手、私の避難所。それは私の神であるあなた。」私は彼に希望をおく。

なぜなら狩人の畏から、また棘のある言葉から私を解き放ってくださったのは彼だから。

彼はあなたをその翼で包み、彼の羽根のもとであなたは希望を抱く。

彼の真理が盾のようにあなたを囲む。あなたは夜の恐怖を恐れることはない。

日中に飛びくる矢も、闇に迫り来る陰謀も、真昼の悪魔の攻撃も（あなたは恐れることはない）。

あなたの傍らに千人、あなたの右に万人倒れても、死はあなたには近づかない。

なぜなら主はそのみ使いたちに、あなたの進む道すべてであなたを守れと命じられたから。

あなたの足が石につまずかないように、み使いたちは手であなたを支える。

あなたは蝮と蜥蜴を踏みつけ、獅子と竜を踏み潰す。

彼が私に希望をおいたから、私は彼を解き放つ。私は彼を守ろう、なぜなら彼は私の名を知っているから。

彼が私に呼び求めるなら私は彼の願いを聞き入れよう。苦難のさなかに私は彼と共に居る。

私は彼を救い出し栄誉を与えよう。彼に永く生きながらえさせ、私の救いを見届けさせよう。

ここでの旋律は、詠唱に見られる、装飾音のついた詩編朗唱の2つの表現形式のうちの一つを用いています。第一の表現形式は、これまでの3回の主日で聞きました。今日の表現形式はより穏やかで流動的で、断固たる調子はなく、より内的で大いに表現力に富んでいます。

奉献唱 : *Scápulis suis*

四旬節第一主日のミサの最後の2つの固有唱、奉献唱と拝領唱には、まったく同じ歌詞が使われています。これはまた本日の主日のもうひとつの特徴で、典礼の中でも唯一の例ですが、グレゴリオ聖歌の旋律は同一の歌詞に2つの異なる表現を提供しています。詩編90の節が採用されていますが、ここでは神の保護が美しいイメージで表現されています。

Scápulis suis obumbrábit tibi Dóminus, et sub pennis ejus sperábis : scuto circúmdabit te véritas ejus.

主はその翼であなただを覆い、その羽根のもとであなただは希望をいだく。主の誠実さが盾となり、あなただを取り囲む。

奉献唱の旋律は入祭唱の旋律に似ています。静謐さと平和な安心感に満ちています。まさに、支配しておられる主の保護のもとにある安心感と言えるでしょう。

拝領唱 : *Scápulis suis*

四旬節第一主日の拝領唱のアンティフォナの歌詞は、奉献唱と同じです。

Scápulis suis obumbrábit tibi Dóminus, et sub pennis ejus sperábis : scuto circúmdabit te véritas ejus.

主はその翼であなただを覆い、その羽根のもとであなただは希望をいだく。主の誠実さが盾となり、あなただを取り囲む。

しかし、奉献唱の旋律がかなり静的で、穏やかな安心感に満ちているのに較べて、拝領唱の旋律はより動的です。この旋律の中には、すでに始めた闘いに勝つために不可欠な、神秘的な高揚感がよぎるのが感じられます。